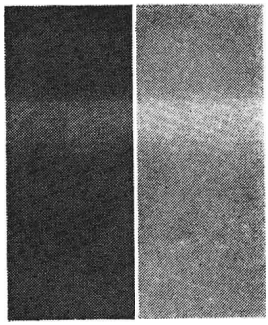
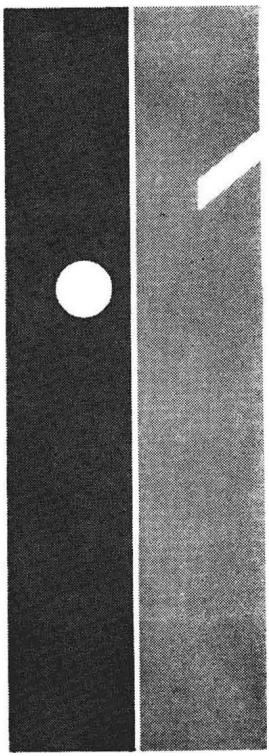


ソ連の国営保険

Л. А. モティレフ 著
笠原長寿・水越哲郎監訳



東京 白桃書房 神田

監訳者略歴

笠原長寿（かさはら ながひさ）

現　在　明治大学教授
主要著書　「保険経済の研究」
「ソ連邦の保険」（翻訳）
「労働者福祉論」（共著）

水越哲郎（みずこし てつろう）

現　在　中央労済専務理事
主要著書　「現代の生協運動」（共著）
「労働者福祉論」（共著）

訳者との申し
合わせにより
検印省略

昭和50年4月1日　初版印刷　　昭和50年4月6日　初版発行

ソ連の国営保険

監訳者　笠原長寿
水越哲郎

発行者　大矢順一郎

印刷者　内山一郎

＊　＊　＊

発行所　株式会社　白桃書房
101 東京都千代田区神田神保町1-42
電話(03)294-8911(代)　振替東京20192番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。　昭文堂印刷／刈込製本

書籍コード　3033—964248—6915

エリ・ア・モティレフ略歴（自叙）

レオニード・アレクセヴィッチ・モティレフは1928年に生れた。

1952年，モスクワ財政大学保険学科卒業（専攻——経済学）。ソ連邦ゴスストラッフ（国営保険）中央管理局で勤労生活を開始。

1966年にソ連国営保険部長に就任。

1973年にソ連邦ゴスストラッフ中央管理局長に就任。ソ連財務省参与会のメンバー。

エリ・ア・モティレフは行政活動に従事しながら保険の分野における科学研究活動にたずさわる。1966年に「ソ連における農作物国営保険の経済的効果の分析」というテーマの論文で准博士学位を取得。1973年エリ・ア・モティレフは「ソ連における国営保険の社会的経済的内容とその発展の諸問題」というテーマの論文によって経済学博士の学位を取得。

エリ・ア・モティレフはさいきん数年間に保険に関する出版物を数多く発表したが，そのうち主なものは1971年発行の教科書「ソ連の国営保険」と「ソ連の国営保険とその発展の諸問題」（1972年）である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

監訳者まえがき

本書は，Л. А. Мотылев, Государственное Страхование В СССР и Проблемы Его Развития（エリ・ア・モティレフ著『ソ連の国営保険とその発展の諸問題』モスクワ，1972年，「財政」出版所）の全訳である。

これまでわが国で公刊されたソ連の保険に関する唯一の体系的文献は，エフ・ヴェ・コーニシン著『ソ連邦の保険』（笠原長寿訳，1960年，白桃書房）にとどまる。

著者は，コーニシン教授の教え子で，その略歴が物語るようにソ連国営保険事業の優れた指導的実務家であるだけでなく卓越した研究者である。本書は，著者が1973年に提出した博士論文，「ソ連邦国営保険の社会的・経済的内容とその課題」と内容をともにすることは十分推測される。

ソ連の保険制度は，1917年の社会主義革命以後，新しい社会主義的保険としての基礎を確立し，その後の社会主義建設の発展に応じた制度の一連の改革がなされてきている。とくに，1968年の改革は，農業保険の根本的改革と人保険部門の一層の改良を中心にすすめられ，それを契機としたその後の保険事業の急速な発展が注目されるのである。

社会主義下の保険の意義とその役割についての基礎的命題は，科学的社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルスによって明示され，レーニンの指導のもとに社会主義ロシアにおいて実践化され，今日ではほとんどの社会主義諸国に定着し発展しつつある。

しかしながら，社会主義社会は，その目的原理の具体化の要として社会保障の確立を求めている。事実，社会主義国の社会保障は，その適用範囲，給付水準，費用負担（ほとんど無料），民主的運営等々で資本主義国のそれと比較してすぐれた特徴を帯びている。にもかかわらず，こうした社会保障の発展と並んで存在する保険主義にもとづく普通保険の存在と発展の現実について素朴な疑

問とその理論的解明を求めるものは少なくないであろう。さらに，社会主義国における保険存在の客観的事実を肯定したとしても，社会主義国の保険と資本主義保険との本質的特徴について関心がもたれるであろう。

とくに，保険会社の活動を中心とする今日の資本主義国の保険は，インフレーションにともなう保険価値の目減り，大企業中心の保険資産の運用，保険企業間の競争と寡占化のもたらす経営の腐朽化現象との関連で，保険企業と契約者ならびに国民大衆との間に鋭い利害の断層を生み出し，契約者，国民の利益を基礎とした保険企業のあり方を求める消費者運動が発展している。とくに，わが国保険資本の運動を貫くこれまでの行動的特質は，一層その矛盾を加重させている。コンシューマリズムの高まり，共済運動の発展のなかで，保険企業と保険行政は保険のあり方についての再検討を止むなくされ一定の改良策が実施されつつある。こうした状況の下で，マルクス＝レーニン主義の方法で保険の経済的本質と内容を豊富な文献と資料にもとづいて分析，解明するだけでなく，ソ連邦保険の現状の諸問題を率直に提起している本書は，社会体制のいかんにかかわらず，契約者の個人的利益と社会・国民全体の利益との統一と結合を求める今後の保険のあり方に一定の示唆をあたえるものと思われる。

翻訳は，序文および第1章・笠原長寿，著者略歴および第2章第2節・水越哲郎，第2章第1節および第3章第1節・吉田智道，第3章第3節および第4章・大久保次男，第3章第2節および第5章・石井洋一がそれぞれ分担し，笠原長寿と水越哲郎が共同で全体の監訳を担当した。

本書が狂乱物価の折，とりわけ印刷関係費の高騰にもかかわらず比較的低価格で出版できたのは保険学振興基金による出版助成が一助となっていることを記しておく。

なお，適切な御教示をいただいた印南博吉教授またメジクニーガとの連絡でお世話になった日ソ翻訳出版懇話会の金子健氏と快く出版を引受けていただいた白桃書房社長大矢順一郎氏に感謝する次第である。

笠　原　長　寿

著 者 序 文

ソビエト人民の将来の福祉向上と国家の経済的発展の広範な計画は，完全でいっそう進歩的な国民経済の組織と管理制度を必要とする。

ソ連邦共産党第24回大会は，財政信用制度にたいして財政ならびに銀行機関活動の活発化と国民経済上の金融的相互関係改善におけるその影響の強化，社会的生産の効率性向上に関する偉大で重要な課題を提起した。

党の第24回大会の指令は，「生産余力をもっと十分に動員し，生産効率を高めるように，財政機関および銀行の働きかけを強化する。技術進歩の促進と生産の集約化のために財政・信用制度をひろく利用する」ことを謳っている。

社会主義財政の主要な構成部分をなす国営保険は，農業生産の経済的安定の確保とソビエト国民の物的福祉増大のために年々きわめて重要な価値をもたらす。現在，コルホーズの農業収穫物，家畜，建物，設備その他の財産は金額にして約760億ルーブルが付保されており，また住民の財産および人保険に関する保険金総額は810億ルーブルをこえている。

わが国の保険事業の今後の発展は，1971年から1975年にわたるソ連邦国民経済発展5カ年計画についての第24回大会の決定にしたがって定められている社会・経済政策の重要課題の実現と関連して文字通りの無限の可能性を帯びている。国営保険のすべての種類の資金(ファンド)総額は，第8次5カ年計画中の年平均額24億ルーブルであったが，現在の5カ年計画では50億ルーブルをこえている。すなわち，1971年から1975年の期間中に国営保険の資金(ファンド)は，1966年から1970年のあいだに得た金額の2倍余にあたる約250億ルーブルに達するであろう。すべて，このことは，自然の破壊力の不幸な影響やさまざまな不慮の事故や災害にさいして農業や住民にいっそう効果的な援助をあたえることを可能にする。

農業の計画的発展とコルホーズおよびソホーズの経済的・財政的可能性の増大ならびに経営的独立採算原則の定着は，農業生産の必要とコルホーズおよび

ソホーズの経済的安定性の確保を目的とする保険事業発展の一連の問題を科学的に解決するための国営保険のより効果的な利用を強く求めている。

住民の財保険ならびに人保険部門には，経済的範疇としての保険をソビエト国民の福祉向上や共産党とソビエト政府による勤労者のための経済・社会政策制度のなかに正しく位置づけ，全面的に利用するために解決を必要とする多くの重要問題がある。

国民の生活水準の不断の向上と賃金の増大および生活消費財生産の拡大は，保険の今後のいちじるしい発展と，いっそう広範な，かつ多様なかたちによる推進の具体的基礎である。

国営保険の資金(ファンド)分配は，農業のいっそうの経済効率を実現し，また労働者とおのおののソビエトの家族の物的福祉の保護に大きく対応しなければならない。

社会的生産の発展に関する，マルクス＝レーニンの教えにもとづく真の活動は，社会主義下の保険の経済的本質の完全な解明，および，保険事業の実態分析といっそうの向上のための命題の研究，ならびに，現段階の共産主義建設のもとでの国家と住民の経済的必要にこたえる，新たな保険種類の開発を目的としている。

今日の条件のもとでは，国営保険の将来の発展課題の理論的研究と，実践的解決がとくに必要である。なぜなら，国営保険は保険(予備)ファンドの形成と利用方法の一つであるためである。1971年から1975年にいたるソ連邦国民経済発展5カ年計画に関するソ連邦共産党第24回大会の指令は，「国民経済における物質的資源の国家予備とストックの計画化，その形成と利用の機構を改善する」ことを定めている。

国営保険のいっそうの完成についての理論的問題と実践的命題の研究にさいして，著者は，カール・マルクス，フリードリッヒ・エンゲルス，ヴェ・イ・レーニンによる保険ファンドと保険の経済的内容についての見解を基礎としている。さらに，ソビエト経済学の成果とヴェ・カ・ライヘル，エフ・ヴェ・コーニシン，エム・カ・シェルメネフ，エ・ヴェ・コロミン，エリ・イ・レイト

マン，ア・ペ・プレシコフ，エ・タ・カガロフスカヤ，ペ・デ・ポロビンキン，エ・エフ・ジューコフその他のソビエト経済学者の労作にもとづいている。外国の保険問題については手元の文献を，実際資料と統計はソ連邦国営保険総管理局ならびに連邦構成共和国国営保険局機関および外国保険管理局の資料を使用した。

社会主義下の保険ファンドならびに保険の経済的本質と社会的拡大再生産の確保におけるその役割およびソビエト財政制度における経済的範疇としての保険の位置づけに関する研究については，ヴェ・エフ・ガルブーゾフ，エス・ゲ・ストルミリン，イ・デ・ズロービン，カ・エン・プロトニコフ，ヴェ・ヴェ・ラブロフ，ヴェ・ペ・ヂヤチェンコ，エス・ア・シタリヤン，デ・ア・アラフベルヂヤン，エル・デ・ビノクル，ヴェ・エス・クリコフ，ア・エム・ビルマン，ア・イ・ノートキン，エム・ヤ・ソーニンその他のたすけによることが大きい。

ソ連邦国営保険のいっそうの向上と発展および勤労者の社会的・個人的利益のための今後の研究の主要課題はアクチュアリー的諸問題の解決を促進することである。

凡　　例

1　本書は，ソ連邦国営保険局長官，経済学博士エリ・ア・モティレフの著書『ソ連の国営保険ならびにその発展の諸問題』(「財政」出版所，モスクワ，1972) (Л. А. Мотылев 《Государственное страхование В СССР и проблемы его развития》 Издатель ство 《Финансы》 Москва, 1972) の全訳である。

2　本訳書の題名は，訳者の責任で，『ソ連の国営保険』とした。

3　原文がイタリック体のところには，訳文では傍点を付した。

4　マルクス，エンゲルス，レーニンの著作からの引用個所は，大月書店版『マルクス＝エンゲルス全集』および『レーニン全集』によってしめした。

5　同上の引用個所は，『資本論』については，該当個所のある「章」と「見出し」を，その他は，書名を示した。

6　本訳書中の“ファンド”という振仮名は訳者によるものである。

7　地名は必要に応じて，その位置を（　　）の中で説明した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　　次

監訳者まえがき
著者序文

第1章　保険ファンドと国営保険の経済的範疇……1

第1節　保険ファンド，保険，拡大再生産上のその役割に関する科学的共産主義の創始者の見解……1
第2節　社会主義の計画的でつりあいのとれた国民経済の発展を確保するための保険ファンドと保険の意義……12
第3節　保険と労働力の再生産……29

第2章　社会主義のもとでの国営財保険および人保険の経済的・社会的基礎……43

第1節　ソビエト財政制度における経済的範疇としての国営保険……43
第2節　レーニンの保険政策とソ連国営保険の発展……64

第3章　農業保険発展の見通し……87

第1節　コルホーズ財産保険の新契約条項の経済的内容……87
第2節　コルホーズ農産物保険の今後の改善と発展の課題……118
第3節　ソホーズにおける保険再編成の必要性と農業保険の今後の発展の道……134

第4章　住民の人保険および財保険の今後の課題……169

第1節　勤労者の物質的福祉の増大と社会主義のもとでの人保険および財保険の発展……169

第2節　人保険の将来の課題……183
第3節　市民所有財産保険の当面する課題……201

第5章　民事責任保険の課題……209

第1節　自動車等の民事責任保険制定の社会・
経済的内容と必要性……209
第2節　自動車等の民事責任保険の基礎的条項……211

索　　引……225

第1章　保険ファンドと国営保険の経済的範疇

第1節　保険ファンドと保険，拡大再生産上のその役割に関する科学的共産主義の創始者の見解

社会主義拡大再生産における保険の役割についての全面的な科学的研究は，社会的生産についての，とりわけ予備ファンドの一部としての保険ファンドの社会的生産の発展過程における意義に関するマルクス＝レーニンの教えにもとづいて達成することができる。

人間社会発展のすべての国における物質的福祉の生産過程は，人間と自然の相互的な組織的統一を示している。しかし，生産過程のすべての現象は，内的に矛盾している。人間は，たえず自然に働きかけて労働過程に自然の力を利用する。しかし，自然の法則的発展についての人間の認識は必ずしも完全でないために，自然は，しばしば，正常な生産過程を破壊したり，人間自身による行動結果の予測をこえた破局的結果をもたらす統制しがたい力を発揮する。

科学的共産主義の創始者は，このような客観的法則を考慮して，社会的進歩の可能性，社会的生産の発展，物質的福祉の生産過程における自然の予測しがたい力の影響の経済的克服は，人間の剰余労働がもっぱら社会的生産ならびに予備ファンドのために必要な生産物を生産し始めたときにはじめて実現されることを，彼らの叙述のなかで再三にわたって指摘している。

基礎的命題を主張し発展させたカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスはつぎのように述べている。「動物的野蛮の段階をこえての人間社会の全発展は，家族の労働がこの家族の生計の維持に必要であるよりも多くの生産物をつくりだしたその日から，すなわち，もはやたんなる生活手段の生産にではなく

生産手段の生産に労働の一部をあてることができるようになったその日から始まる。労働生産物が労働の維持費をこえてある剰余を生じ，この剰余で社会的生産，予備元本(ファンド)が形成され，また増大していくことは，およそ一層の社会的，政治的，知的な発展がおこなわれるための基礎であったし，いつでもそうである。[1]」(傍点著者，振仮名訳者)。

かくして，科学的共産主義の創始者による人間社会の発展は，生産および予備ファンドのために必要な生産物の創造とつねに関連づけられ，しかもこの場合，予備ファンドは，社会的生産の発展の可能性を保障する範疇としてみなされている。

社会主義のもとでの保険ファンド形成の客観的必要性について，マルクスは，彼の著作で繰返し述べている。「それはまた，剰余価値および剰余生産物のうち，つまり剰余労働のうち蓄積のために，すなわち再生産過程の拡大のために役立つ部分のほかに，資本主義的生産様式の解消後にも存続せざるをえないであろうただ一つの部分である。[2]」また同様に，エンゲルスは，「全般的な生産的労働が義務づけられている社会……においては……社会的な予備基金(ファンド)や蓄積基金の必要はなくならないであろう。[3]」と述べている。

マルクスは，社会主義社会でつくられた社会的総生産物の分配問題を論じた，「ゴータ綱領批判」で，拡大再生産過程の確保のためにまず第一に，社会的総生産物のなかから，つぎの控除がなされなければならないことを，明示している。

「第1に，消耗された生産手段を置きかえるための補償分。

第2に，生産を拡張するための追加部分。

第3に，事故や天災による障害にそなえる予備積立(ファンド)または保険積立(ファンド)。

『労働の全収益』中からこれらのものを控除することは経済上の必要であって，……。[4]」

---

(1) 大月書店版，マルクス=エンゲルス全集，第20巻『反デューリング論』200—201頁。
(2) 同上，第25巻『資本論』第3巻第49章「生産行程の分析のために」1085頁。
(3) 同上，第21巻『哲学の貧困』ドイツ語第1版への序文（エンゲルス）191頁。
(4) 同上全集第19巻『ゴータ綱領批判』18—19頁。「第3に」の振仮名は訳者。

以上の引用では，まず第一に，社会的生産拡大のための保険ファンド形成の客観的必要性が指摘されているとともに，社会主義を含む異なった社会的生産様式のもとでの社会的総生産物の生産と分配の密接な結びつきについて強調されている。

かくして，社会的再生産発展のための保険ファンド創造の理由の一つは，生産過程における人と自然の相互関係そのものから発生する矛盾としての，労働過程中の自然的要素の否定的影響——有効的影響と並行する——である。このような生産過程本来の内的矛盾は，その性質上，原始社会から社会主義生産様式にまで及ぶため，人間は，「自分の欲望を満たすため，自分の生活を維持し再生産するために自然とたたかわねばならない……，しかも，どんな社会形態，ありうべき生産様式のもとでも」[5]。人と自然とのたたかいは，社会の生産力水準が高まれば高まるほど，また生産関係がより進歩的であればあるほどそれだけ強化される。

エンゲルスは，人間社会の歴史的発展の問題を研究してつぎのように述べている。「急速に増大してゆく自然法則の知識とともに，自然の反作用のための諸手段もまた増大していった。」……人間は，「狭義の動物から遠ざかれば遠ざかるほど，それだけ自分たちの歴史を自分たちで意識してつくりあげるようになり，このような歴史にたいする予期せぬ作用や統御されないもろもろの力の影響はそれだけいっそう少なくなり，歴史の結果はあらかじめ設定された目的にそれだけいっそう正確に対応するようになる。」[6]

ソビエト権力の時代にわが国の国民経済の全分野と文化的発展のなかで生じた歴史的変革は，社会主義のもとでの生産関係の偉大な役割を顕著に物語っている。わが国は短期間に遅れをとり戻し，進んだ農業をともなった強力な工業国家に移行した。科学の成果を利用するソビエト人民は，天然資源を計画的に手に入れ，生産の発展にとって好ましくない自然作用をつねにいっそう確実に克服し，多くの点で予防する。

---

(5)　前掲全集第21巻『資本論』第3巻第48章「三位一体的範式」191頁。
(6)　同上全集第20巻，353頁。

しかし，これらのすべては，社会主義社会の今日の生産力水準のもとで，生産とくに住民に多くの損害をもたらす農業に，重要な経済的影響をあたえる天災とのたたかいの諸問題を完全に解決していることを意味しない。さらに，もしも自然的災害が農業に顕著な経済的損失をもたらし，住民に物質的損害をひき起こすならば，社会の生産力の発展にとってマイナスをあたえることがしばしば発生する。それゆえ，生産過程の不断の確保と消費水準のいっそうの向上のために，凶作，家畜の流行病，洪水，地震などに備えた多くの物質的ならびに財政的予備の創造が必要である。

社会主義のもとでは生産手段としての天然資源は，人民の所有である。それゆえ，資源は社会の利益のために合理的，計画的に利用される。社会主義の場合，国民経済上の諸問題の解決に関する科学的態度は，天然資源の大切な利用と自然保護の広範な政策を定めている。結局そのことは，社会的生産を都合よく発展させ自然の不可抗力的作用やその他の災害による損害額を少なくする。

ソ連邦国民経済発展5カ年計画（1971～1975）に関するソ連共産党第24回大会報告は，「自然保護の強化」についてつぎのように述べている。「天然資源――土地，水域，大気，地下有用鉱物――の合理的利用ならびに動植物の再生産にたいする各省庁，企業，施設，団体の責任を高める。」[7]

資本主義生産様式の場合，生産の無政府性，自然破壊，競争は土地その他の私利のみを求める自然資源の無統制な利用をもたらすまったく別の状況をひき起こす。その原因についてマルクスは，「資本主義農業のどんな進歩も，ただ労働者から略奪するための技術の進歩であるだけでなく，同時に土地から略奪するための技術の進歩でもある……」[8]と述べている。

社会的生産における保険ファンドと，その役割の経済的本質の問題を研究した科学的共産主義の創始者は，保険ファンド形成の源泉に大きな注意を向けた。周知のように，保険ファンドの創造は，何よりもまず，自然の破壊力その他一連の災害から正常な再生産過程をまもるために，社会的に準備される物質

(7) 大月書店版，『ソ連共産党第24回大会，報告・決議・指令』230頁。
(8) 前掲全集第23巻『資本論』第1巻第13章「機械と大企業」657頁。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com